



町は黒字？ 赤字？ 決算の読みかた

この講座では初回から第5回まで、町債と基金という、過去から積み上げてきた数字に関し取り上げてきました。今回からは、単年度のお金の流れに話題を移します。今回は、単年度予算における黒字、赤字について、9月議会でお認めいただいた令和5年度決算を通して読み解いていきたいと思っています。11月号に決算報告が掲載されますので、併せてお読みください。※万円未満は切り捨てのため細かい数値が一致しない場合があります。

「黒字」は約3億9千万円

令和5年度一般会計は、歳入が90億1341万円、歳出が84億6439万円で、単純な差引額が5億4901万円となりました。こ

のうち、翌年度である令和6年度に工事等を先送りした「繰越明許費」が1億6055万円あることから、先ほどの単純な差引額から引いた金額は3億8846万円となります。この金額が、令和5年度の結果的な「黒字額」となります。財政規模からするとこの黒字額は妥当を超え良好といえるかと存じます。地方財政法第7条の規定によりこのうち半分以上財政調整基金に積むことが定められているので、2億円を財政調整基金に積みました。残りは令和6年度一般会計への繰越金としております。

ただ、先ほど述べた黒字額、大きくればいいかというとそれほど単純な話ではありません。黒字額が大きいほど次年度以降使えるお金が増えますので、中長期の財政

運営は安定します。ですが、黒字額が大きすぎると、本来はその年度中もつと多くの事業ができ、町民の皆さんのお役に立てたはず、とも言えます。基金を貯めること自体は目的ではなく、将来町民のお役に立つ手段だということです。

歳入増、歳出減がダブルで貢献

さて、黒字額が大きくなるには、歳入が予算より増えるか、歳出で「不用額」が多く出るかのいずれかとなります。歳入・歳出の両方をもう少し細かく見てみましょう。

歳入で、年度当初予算から大きく上振れたのは、地方交付税（15億5337万円で1億837万円増）、財産収入（2億3650万円で2億211万円増）、寄附

金（6億7447万円で1億6797万円増）、繰越金（3億6522万円で2億1522万円増）あたりです。地方交付税は人口増に合わせて必要額の査定が大きくなったのに加え、企画財政課の努力・工夫により特別交付税が増えたのが要因です。財産収入は旧役場跡地の売却により増えます。寄附金はふるさと納税の増加、繰越金は前年度の黒字額が大きかったことにより増えました。

歳出で、不用額が大きかったのは総務費（6858万円）、民生費（9434万円）、衛生費（1億551万円）、土木費（7451万円）あたりです。全体に予定より人件費、光熱水費が抑えられた傾向があります。特に光熱水費は電気料金の高騰を見込んでおりま

したが国の補助金が継続するなど、そこまではなかったのが要因かと思っています。また、土木費では工事請負業者の入札により予算よりも金額が小さくなる「入札差金」が要因となっています。単に黒字になったとしても、どの部分で黒字が増えたのか分析することが次年度以降の財政運営につながっていきます。

今回の結論

健全な黒字をキープ

今回は、「儲かる町」は何が違う？と題し、地方交付税の仕組みについて紹介します。



過去の講座はこちらより
ご覧いただけます

単年度黒字の要因となる、歳入の上振れ・歳出の下振れ例（令和5年度一般会計予算）

歳入	当初予算額	決算額
地方交付税	14億4,500万円	15億5,337万円
財産収入	3,439万円	2億3,650万円
寄附金	5億650万円	6億7447万円
繰越金	1億5,000万円	3億6,522万円
その他含む総計	74億8,275万円	90億1,341万円

歳出	予算現額	支払済額	不用額
総務費	17億1,727万円	16億336万円	6,858万円
民生費	25億5,882万円	24億5,839万円	9,434万円
衛生費	5億9,208万円	4億8,605万円	1億551万円
土木費	20億5,736万円	15億8,868万円	7,451万円
その他含む総計	95億14万円	84億6,439万円	4億9,636万円

※予算現額と支払済額の差が不用額と一致しないのは、繰越明許費があるため